



第 13 号

1970. 6

書

評

編集・発行
関西大学生協同組合
組織部
「書評」編集委員会
編集人 原田秀徳

吹田市千里山17
TEL 388-1121
内線 776

幕末期の日本における インヴィジブル・カレッジ

有坂隆道編「日本洋学史の研究」

島尾永康

<技術>を人民の手に

星野芳郎編「日本の技術者」

原田二郎

社会主義教育の実践

E・J・キング編「社会主義の教育」

海老原治善

私の研究ノートから

古代の謎に挑む II

網干善教

いわゆる「マイホーム主義」 について

十 一

巻頭言

■ カット写真は英伸三作品「北富士梨ヶ原」
(アサヒカメラ5月号)より

書籍購入グループを創設し
一括共同購入を推進しよう
書籍の生協一元化をかちとろう

資本制社会における階級支配が「所有」の秩序を暴力的に貫徹する国家権力の暴力措置によって、日常的には「経済的」「行政的」「教育的」措置によって階級解体として進行している。この過程で「社会のヒズミ」が指摘され、疎外からの解放、高度管理社会からの人間性の回復といった主観的願望が、帝國主義構造の確立化の進展にそって喧噪されている。そこに、△社会▽と△生活▽||△私▽の分裂、対立の極端な情況が反映している。

都市部では、④住宅 ⑤公害 ⑥物価 ⑦交通 ⑧医療 ⑨教育改編 ⑩国家権力―官僚―警察への恐怖などの諸事実、農村部では、国家権力による米の生産調整―生産手段の収奪―土地から農民を追い出すこと、労働をさせなくさせる、この労働と生活の關係の変化は、全社会的に進行している。この分裂、対立は△三里塚▽に象徴的にみられ、労働と生活の關係が根源的により豊富にとらえかえしを客観的にも、主体的にも要請しているといえる。

今日、労働はより一層強制となり、苦痛、辛苦を伴ったものとしてあり、生活はより物質的な、享樂的な、刹那的な消費へ変貌し、非生産的な家族關係が維持されている。この私的共同生活が、弧閉の中に、砂をかむような生理的命脈の維持でしかない。都市部では、私的共同生活の保障を企業体、行政官庁に求め衡動的に徘徊している。これは、労働と生活の分裂、対立の克服への志向ではなく、△生活▽のもの本来の構想的志向性を転倒、自己閉鎖しうる危険性をもっている。政治的、経済的、社会的構造の矛盾の自然な反映としての、市民、住民による自発性の運動性組織性の表出は、自からの手による管理・運営体の構築化へ進展しなければならぬ。人民の、市民の管理、運営は、強制された組織での畸形的労働を阻止しうる基質であり、△生活▽△労働▽の問いの場である。これを、官僚に全面的に委ねることによって、管理、運営は持続した運動体となることができえずに、運動を終焉、無意味化させてしまう。更に官僚が社会的生産の私的占有者になり転倒關係が固定的、体制的なものに變貌してしまう危険性を常に内包していることに留意すべきだろう。△私▽たちの一人一人の自由な△実践▽が△私▽にとって対立、敵体關係を惹起する。

これでは、行為―実践―思想の無力として表出せざるをえない。擬制の解体の△私▽の實踐―思想の獲得、それは持続的、緊張關係の場―未来への構築の方法論の実圧化なしには状況に言いつまうだろう。

混沌とした諸事実のカオスの中に△私▽が生きていることは、丸山真男の設定した「理論信仰」と「実感信仰」という疎外された意識の表出の粹を越えた地平への構想への運動の目的の理論と、価値が、疎外体系の日常の状況―現実との間の相克、矛盾をどのように実践的に止揚しうるのか。それは△私▽を主体としてい

言 頭 卷

かに形成しうるのか、を問われることといえよう。

さて、△私▽たちはいかなる未来への構想を設定しうるのか。今日、④「コトビズム」の破綻 ⑤「コミュニティズム」の崩壊 ⑥「未来学」への不信、これらに反して「変革」「自己」の実在化が一般化している。

④「ユートビズム」の破綻は、階級なき社会Ⅱユートピアの構想それ自体に問題があるよりはむしろこれを現実的諸関係の中に実在しうる、媒介させうる△項▽の喪失に求められる。⑤「コミュニティ」の崩壊は、社会主義思想の律動的な内的展開の喪失性に求められる。△歴史▽が物象化され、問う意味のない「自然史的法則性」への転落化―それは、資本主義社会の資本と労働者の転倒関係に依拠することによって、風化し、恐怖にみちた赤い妖怪ではなくなった。虚構と化しているさまを直視しはじめ△歴史▽における主体と客体の律動的、相克性の弁証法の実在化が今日の課題といえよう。⑥「未来学」への不信は、未来学が一切を△もの▽としてとり扱うこと即ち、「管理の思想」であるが故に、未来への指針も獲得したい砂粒の△私▽―(大衆)の未だ獲得しえぬ焦燥、無力感の主観・情念へ分散状況と二重写的に表出している。

未来への橋梁の方法論―それは△生活▽△労働▽を基軸にした共同体の創設へ歩み出すことだろう。△共同性▽と△階級性▽の転倒関係の克服へ具体的に追究し、内的矛盾の循環体系の止揚へ切拓くことを全体に構想することが總体的な要請だろう。

モリスの「ユートピアより」、フリーエの「共産団体」、それは古典として近代の祭壇にまつりあげられるのではなく、蒼古の世界への回帰―転倒した△労働▽△生活▽△共同性▽△階級性▽の関係の止揚への運動的、媒介的なものへの未来の構想であった、といえよう。そこには、自由で個性的な自己形成―一切の抑圧からの解放された苦惱の性の歓喜の△生▽へ、共同体の構想(築)への運動形成は、死滅したユートピアだろうか。

未来への橋梁の構築の作業しうるにはあまりにも主体的力量は弱すぎるだろうか。この投企は△私▽も△他者▽も△商品▽として物化、機能分化してしか構築作業しえない。この疎外体系の中に△私▽△他者▽が実在する。この内的な矛盾としての△私▽△他者▽こそ基礎的物質といえるだろう。疎外体系に規定された△私▽が同時に未来を形成する主体であるという実践的意味―私を主体として形成しうる。

六七―六九年の「軍事」Ⅱ「政治」は、總体的な「原形」であった。七〇年は△歴史の主体▽としての△私▽の生きることの意味の深化であるといえる。





有坂隆道編

『日本洋学史の研究』

幕末期の日本における インヴェイジブル・カレッジ

■ 島尾 永康

本書は五編の論稿からなる。福岡藩における洋学（井上忠）、大阪における洋学（有坂隆道）、大阪の町人天文学者、関重富（末中哲夫）、以上いずれも短か

い論文で三篇をあわせても本書全体の五分の一以下にすぎない。第四の、京都の蘭学者、辻蘭室（山本四郎）は、かなり詳細な研究である。そして最後の麻田流

天文学者の書簡集、「星学手簡」の紹介（有坂）は、本書の約三分の一の分量を占める。福岡、大阪、京都の蘭学を扱っている本書は、したがって西日本洋学史

の地域的研究ということになる。ただし長崎は扱っていない。

寛政から明治初年にかけての八〇年間における福岡藩洋学を、思想的系譜・業績・特色について論じた第一の論文は、本書の中でも最も興味深い。官学朱子学を正統藩学としながらも、これに對抗して古学派の流れを汲む自由主義的な第二の藩校を設立した福岡藩の政策もおもしろいが、結局この学派が洋学受容の素地をつくることになる。しかし幕府による異学の禁の余波をうけて、設立後わずか八年にして廃校となる。その門に学び正統藩学に帰依しえないものの中から洋学

者が出た。かくてかれらは、はじめから反体制に位置づけられる。しかし古学派がただちに西洋の科学技術の受容にむかっただけではない。かれらの関心はむしろ、國防的見地から、世界地理・世界歴史などの西洋知識を吸収するにあった。科学技術の吸収にあつたのは、古学派との関係がうすく、一度はシーボルトの門をくぐつたことのあるものの中から出ている。実証主義的傾向をもつといわれる古学派が、福岡藩では科学技術の受容に関して、むしろこれを阻害する立場にまわつたのである。以上が第一の論文の論旨である。古学派がなぜ科学技術を受容する思想的基盤となりうるか、また京阪の蘭学者の科学的精神を鼓舞した古学が、福岡藩ではなぜ挫折したか。そのあたりの思想的説明がもっと深くなされたなら、面白い論文となつたであらう。

この天文学と医学との組み合わせには、科学史的には見のがすことのできなない意義がある。西洋の科学革命は、天文学と解剖学、大宇宙と小宇宙の構造の解明に端を発しているのだ。ヨーロッパに運れること二百数十年、一人の麻田剛立にコペルクスとウエザリウスと比較解剖をおこなつた剛立に、ハーヴェイをみることもできよう。(時代は近いがキュウイェになぞらえるわけにはゆくまい。)その剛立はまたケプラーの第三法則を独立に発見したともいわれている。一世紀以上にわたつて展開された科学革命を、短期間に追体験しなければならなかつたのが日本の洋学者である。いや短期間に圧縮しなければならなかつたのは、科学革命だけではなく、ギリシア以来の天文学全体だつた。オランダ語のよめない剛立やその門下の至時・重富にとって、西洋天文学の知識の供給源は、漢訳の「曆象考成」上下編(一七三三)およびその後編(一七四二)であつた。ところがなんとこの上下編はポトレマイオス天文学、後編はケプラー天文学の紹介であつた。これではまるでフログストン化学とラヴォアジエ化学を同時に受容するようなもので、剛立らの混乱は想像するにあまりある。同じヨーロッパに属するガリレオですら、ケプラーの楕円軌道を理解できなかったのであるから。それでも剛立ら

の天文学知識が当時の日本の最先端をゆくものであつたことは、その門下生、至時がわざわざ大阪から江戸へ天文方として招かれた事実から明らかである。科学革命の小道具の一つ、顕微鏡の製作と利用は、中井履軒においてみることができよう。ヨーロッパに比べて百年のおくれである。コペルニクスの地動説に共鳴して、儒教的価値観に思想的波紋を投じた山片蟠桃は、いわば日本のジョルダノ・ブルノーだ。あるいはまた、科学を導入して封建主義を批判した日本のヴォルテールだ。

以上の人々がいずれも蘭書をよめず、訳書を通じての、セカンド・ハンドな吸収の仕方をしたのに対して、自ら蘭書をよみ、ファースト・ハンドに西洋知識を吸収したのは、橋本宗吉であつた。かれこそ最初の本格的な大阪の蘭学者であつた。しかもたんなる読書家にとどまらず、エレキテルの実験をするという積極性をもつて(一七八三)。静電気学は一八世紀を通じて、さかんに研究された分野であり、フランクリンの研究が一七四〇年代、ブリーストリが一七六〇年代、クーロンの法則は一七八五年に発見されており、大阪の蘭学もついに一八世紀らしいテーマを手がけるまで追いついてきたという感じである。しかし日本の蘭学者はヨーロッパから孤立しており、フランクリンのようにヨーロッパの学者と連絡を保ちつつ、重要な貢献をするというようなことはとうていできなかった。一般に物理的科学的実験分野では、同僚学者とのコミュニケーションなしに、孤立状態の中で有意義な業績をあげることは不可能である。たまたまアメリカに在住したヨーロッパ科学者とみなすべきだとの見解もある(ブライス)。ともあれ有坂論文は宗吉のエレキテル研究の内容にはふれていない。

実験生理学の分野では、人体という特定の対象を扱うがゆえに、孤立状態の中でもヨーロッパより進んだ業績をあげることも可能であつた。伏魔素狄の例がそれである。

以上が第二の論文に現われる大阪の洋学者である。蟠桃における科学思想と封建思想のかかりあひは、より詳細な独立の論究とするに値するだろう。また、傘屋の職人・宗吉が新しい西洋の科学を身につけたことの意味を、デイドロが「百科全書」で意図したように、科学の庶民への浸透、それによる封建主義の批判という見地から論じることができよう。

第三の論文は、この興味ある問題にふいれてるが、何分にも短かすぎる。

第四の、辻岡室に関する長い論文は、著者自らも認めておられるように、資料の羅列にわわっている。

第五に紹介される「星学手簡」は、麻田剛立門下で、江戸へ天文方として招かれた高橋至時と、大阪で質屋をいとなみから、天文研究に打込んだ岡重富との往復書簡集である。珍しい資料を活字にして、詳細な注をつけられた有坂氏の労を多とするが、これもまた一次資料なので、これにもつく今後の研究に期待したい。

当時の天文方は、天体観測と陸地測量との両方に従事しており、伊能忠敬のミニメンタルな大事業を可能にしたのもかれらの努力であった。往年のアメリカの場合、陸地測量にはイギリスから専門家を招いて当らせたのに対して、鎖国下の日本では日本人自らおこなわなければならなかった。そのため天文学と数学との不断の研究を要したのである。この往復書簡はしたがって、今日ならば学会発表や論文発表などによっておこなわれる学者間のコミュニケーションに相当する。ちようどメルセンヌやオルテンブルグの時代のように。したがってこれらの

手紙は、おおむねはなほだ長く、またテクニカルな内容をもっている。

最後に提言と問題点の指摘をこころみたい。

第一に、明治前の各地の洋学グループを、インヴィジブル・カレッジとみなすことである。インヴィジブル・カレッジとは、一七世紀のイギリスで自然発生的におこった、非公式の先駆的な科学技術の研究グループのことで、のちにこれが母胎となって、今日、世界最古の科学アカデミーとして知られるロイヤル・ソサエティが結成された。昨今ではインヴィジブル・カレッジは、膨大な科学界の中で、特定の新しい専門分野につどう百人内外のバイオニアの非公式な集団を指して用いられる。明治前の洋学グループは、在野の自発的な非公式のバイオニアたちであって、正にこのインヴィジブル・カレッジに相当する。長崎通詞のグループ、シーホルトのグループ、オランダ医学の翻訳を主とした江戸グループ、大阪の町人グループなどが存在したが、明

治になって國家の規模で洋学が制度化されたとき、これらのインヴィジブル・カレッジは吸収解消された。したがって、明治前の洋学と明治の科学とが連続か不連続かの議論にたいしては、制度上の不連続があつたにすぎないと考えられよう。

第二は、洋学が日本史にいかなるインパクトをあたえたかである。ヨーロッパ史では、科学革命の前には宗教改革もルネサンスも色あせてみえるようになった、と科学史家でない普通の歴史家が認めるにいたつた(ベタリーフィールド)。日本の場合、洋学は封建諸思想とのかわりあいにおいて、フランス啓蒙思想ほどの役割をはたしたであろうか。またそれは明治維新を促進したであろうか。

第三は、洋学もしくは洋学に刺激された科学技術上の業績の評価の問題である。山脇東洋の「蔵志」(一七五九)は、その内容と図版の精緻さにおいて、二世紀も前のヴェサリウスの「人体の構造」(一五四三)に遠く及ばない。(し

かし山脇東洋の先駆者の意義は海外でも注目されている。)「紅毛雜話」(一七八七)には、日本最初の顕微鏡観察図のつていが、昆虫の図はおおむね一七世紀のスワムメダムの書物から写したものと指摘されている(ファン・デル・パス)。世界的視野での科学史の中で、客観的評価にたえるものがどれだけあるのだろうか。とはいえ解剖学や舍密(化学)の分野で、明治前の蘭学者のつけた訳語が、今日でもそのまま術語としてのこつているものが多いので、この意味でも西洋の科学革命の成果の受容の歴史は不連続とは考えられないのである。

(社会学部教授・科学史担当)

一九七〇・六・一

付記 インヴィジブル・カレッジの科学社会学的考察については、拙訳ブライス『リトル・サイエンス』、ビッグ・サイエンス』(創元社)をみられたい。

〈書評〉編集委員募集

書評は「思想運動」を追求、学術文化活動の交流媒介の場としての意義を持った月刊誌です。あなたも〈書評〉の編集に参加してみませんか。

(詳しいことは生協組織部まで 内線七七六)



『日本の技術者』

星野芳郎 編

原田二郎

技術を人民の手に

片輪の技術者
を否定

本書の構成は、「民間企業」・「官公庁」・「高校」・「大学」・そして「本質論・運動論」とからなっており、星野氏を除く、それぞれの職場で闘っている十人によって分担して記述されている。前述の四章は各々の職場・学校の現状とその問題点を掘り下げ、そして具体例が記述され、終りの章にはこれからの闘いの方向性について記述してある。本書の

特色としては、各章の終りに「コメント」として星野氏を含む十一人による相互批判であろう。しかし本書の志向する方向は、新しい技術者運動であり、マルクス経済学に対応しうる技術の分野での思想の確立であろう。

揺れ動く工学部

「大学が現在のような状態では、こま

かしの技術や災害を発生させる技術や、人間疎外の技術が、独占資本主義下にはならんするのは当然である。大学の教師たちは、工学研究の「基礎」からこのような技術者をつくりあげ、その技術者を資本のもとに送りこむのである。青春は、資本の内部で傷つけられる以前に、大学教師の手によって、すでに魂の奥深く傷つけられていると言うべきである

う。意識的な技術者にとって、大学はならぬ逃避の場所ではありえないことは明らかである。」これは『まえがき』の中の一節である。

池田内閣以後の高度成長により、資本からの要請による理工系学生の急増計画によって、今日のマンモス化した総合大学の中で最大の大世界とも言えるのが工学部である。しかしこれは、教育施設・教育技術の著しい不備不足という形で現れている。しかしながら医学部が対社会的に閉鎖系であるのと対照的に、工学部の場合には開放的・合理的であるので、その矛盾はなしくずし的に処理されてき

た。また以前から産学・軍学協同に反対という形で存在した理工学部での研究に対する批判が、一昨年来の東大・日大を頂点とする全国学園闘争の中で次第にその全貌が暴露された。地方、文科系学部の諸君から理工学部学生に対する「無思想」・「無批判」らの言葉は度々かわされてきたが、本書においても、今日の学生、とりわけ工学部学生に対する批判は厳しいものがある。いわく「成績表の中に修めた数字を証拠に、自分は選ばれた人間だと思ひこんで」等の言葉が言々されている。だが今なお東大都市工学院生によって闘われている、自立的研究者を志向する闘いは高く評価されている。しかし単なる評価でおわるのではなく、全国津々浦々で、東大都市工運動と連帯する運動体・組織体として、闘う技術者連合の創出が急務であろう。

技術と合理化・技術革新

今も昔も、本来の技術の機能と最も相反した方向で開発されている技術は軍事技術である。ここでは、自然に働かされてそこから富を得るところか、人間の生命そのものまでも奪ひ、せつかくの富を破壊し、自然を荒廃させるために科学や技術が駆使されると言う、支配階級の内部矛盾が最も激烈に現れたものである。つまり、支配者の権力の維持・拡大

私的な富の蓄積の為にしか、科学・技術が発展させられなかったことの当然の結果である。しかしこの結果が今日の大きな社会問題である公害等の問題を生じさせたのである。

戦後独占資本主義が強力に押し進めている技術革新は、一方において核ミサイル戦争、他方においては、あらゆる産業にわたる合理化からの要求に基づいている。だが前述のような「自己矛盾」の為に、技術開発のあらゆる分野において技術革新は本質的な壁にぶつかっているため、技術の原理的変革を期待できず、同一原理のままでもなお生産性を上げ利潤を獲得しようとするれば合理化をますます進めざるを得ず、そうなればシステムの巨大化、部分的改良に突き進む以外に道はない。核兵器やミサイルにしても、単に破壊効果の拡大や長距離を極めて正確に飛翔させるという域を脱してはいず、システムの巨大化の方向あるのみである。このシステムという形での合理化は多くの人材が真に創造的な技術開発に向かうのを妨げているばかりでなく、その人材をシステムの巨大化の泥沼の中で絶えず使いつぶすわけであるが、システムの巨大化が人材と資金とをあつくともく呑みつくすという点と、しかも、その人材が次々に使いつぶされるという点とが、現在の技術者不足、技術者の創造性の貧困をもたらしている主な原因であろう。も

ちろん、合理化を全面的に否定するものではないが、資本主義体制下では、我々が好むと好まざるをかわからず合理化の目的は与えられた労働手段や労働対象の機能を最大限に利用して、最大限の利潤を獲得することである。つまり、資本の労働支配のもとにおいて、労働者の剰余価値を徹底的に吸い上げることであり、断じて、労働の苦痛から労働者を解放することや、労働時間を短縮する方向には向かわず、むしろ、労働者に新たな苦痛や職業病を生じさせ、また労働者の人員を減らす方向に進んでいるのが現状である。本書四八五頁を見るならば「労働者は部分労働化され、生産工程の一部品として扱われ、その労働は単純かつ画一化されざるを得ない。このことは必然的に労働者から、労働の本質である自然との対話、創造的活動、仕事の喜びを奪っている。合理化の進行に伴ってそれはますます進行……、そして部品として使いつぶされた末に、ついには技術革新時代に対応し得ない老朽労働力として放逐されるのであるが、それは一人の人間にとつては死を意味しても、資本にとっては新しい血を入れることによるさらには生産力を上げることができる新陳代謝にすぎない。」と資本の論理の非情さが記述されているが、「国鉄五万人合理化」などと例をあげれば限りがないであろう。また科学の「芸術」とも言われる『

技術の論理

アポロ11号」と、鉱山での古典的な事故である炭塵爆発が頻発する「炭鉱」での技術との比較も面白いであろう。

独占資本主義の強力な圧力もでは、仕事の専門分化は前述のように異常に進行している。それで多くの技術者は自己の仕事が、果して人民的であるのか、反人民的であるのか殆んど見当をつげが、人民。それで多くの場合技術自体には元来そのような社会的（階級的）性格はなく、技術はいわば両刃の剣であり、技術自体は超階級的な性格を持つ。すなわち、労働手段によって階級性にも、非階級性にもなると一般に考えられている。本書においてははっきり記述されていないが、星野氏は『設計の思想』と言う語で技術の階級性を肯定している。すなわち、この技術の階級性に立却する運動が本書の中心となる新たな技術者運動であるが、このことについてもう少し考えてみよう。技術は部品としてみれば階級性は見えぬが、全体としてみ、技術全体と人間との相互関係に立ち入ってみれば、階級性が現れるであろう。もちろん、これは技術だけに限ったことだけでなく、自然科学、経済学についても言えることである。もちろん、自然科学や経済学の階級性とは、その現れ方のメカニズムには大きな違いはあるだろう。しかし、自然

法則に基盤をおく技術自身についても、技術を規定する社会目的についても、そして技術と労働者や消費者との関係についても、それぞれ原理的に考えねばならず、そこにおいて初めて人民的な『設計の思想』が打出され、その『設計の思想』が物質化したものが現実的プラントであり、機械であるわけである。とまれ、思想において、人民的思想と反人民的思想とを明確に区別できることは明らかで、その『設計の思想』が物質化したものが、プラントであり、機械であるとすれば、そのプラントに、機械に階級性があると考えるのは当然であろう。

前述したように技術者にとって中立はあり得ず、己れの思想に基いた技術が労働者に対して新たな圧迫となるのか、労働災害や公害を引き起し附近の住民にいかなる影響を及ぼすかは知っていないはずである。それにもかかわらず、多くの技術者はあるべき本来の態度を無意識的に捨て、ただ資本の要請に何らの自立性もなく無方針に従う片輪の技術者で、労働者・地域住民に対し直接に敵対しているのが現実である。労働災害は高度成長に伴い激増しつつあり、四日市市などの石油コンビナート地域や工場密集地域での大気汚染や、水俣病、イタイイタイ病らの水汚染などによる犠牲者の数は決して少くはなく、また、これらの公害を追求するのは、政府を抱えの機関ではないと

いうのも、現代の社会体制の一面を物語っているのではないか。その他、これら労働災害や公害らの被害者が、底辺の労働者や工業都市住民、農漁民であって、大企業の幹部が、高級官僚が職業病で、大気汚染の気管支炎で倒れたことが、また統発する炭鉱でのガス爆発で死亡したことがあったであろう。彼らは郊外に住み、ラッシュアワーにもまれることもなく、しかも自らの手を汚すこともなく、ここにおいても災害の階級の性格をみるではないか。本書四八三頁を引用すれば、「このように労働災害や公害は合理化の問題と密接に関係しており、これらは新産業都市や高度成長等の結果であり、剰余価値の生産を民衆を犠牲に行うという点で、国家政策として展開された合理化の直接的結果であろう。」と。

闘いの方向性

労働災害や公害を引き起こす技術と知りながら、注意を払わない片輪の技術者であることを否定し、全人間的な労働者を要求し、労働の意義を回復させる為には、資本主義的技術労働から離脱するのではなく、逆にその否定的側面を暴露しつつ、それに反抗していく行動の提起。つまり、どこまでも資本に抵抗しつつ先手先手と打ち、次々に資本の思わざる方向に血路を開き、資本の資金で人民的な技術を勝ち取り続けねばならぬ。この事

は技術者にとって重要なことである。また、資本にとって利潤の追求が第一義的であるので、このことは可能であり、技術者が真の技術者として生き抜くためには必要なことである。

もちろん現在の体制の在り方を根本的に変えることが必要であり、社会体制の根本を変えぬ限り技術者の職場は、部分的、または一時的に好転することはあっても、それはその次に矛盾が一層深化する一階層にすぎず、職場環境は返って悪化するであろう。技術者にとって社会体制の変革の意識はどうしても必要である。また、変革の先頭にあるはずの労働者階級のヘゲモニーの下での社会体制の変革の運動に参加することは必要である。本書五三三頁によれば、「技術者は支配機構の中に深く組み込まれているので、技術者層の中の反体制意識は全般的にはなく、その上、生産点の中核部に位置する技術者の反乱に対する報復攻撃は厳しいので鋭い問題意識とゆるい形態の組織が必要となる。比喩的いうとゲリラ的な組織活動である。」と。各企業・官公庁・学校において少人数ながら闘われている新しい質の技術者運動を有機的に結びものとして、『技術者を人民に』のスローガンの下に、闘う技術者連合の創出を勝ち取る必要があるであろう。むしろ、技術者なるエリート意識を捨て去り、プロレタリアートで

あると云う明確なる自覚の上に基くものであらねばならない。

今までも、日本の経営者や労働者についての本は出版されているが、本書のように技術者についての状況と、その階級的立場の論理的分析については、現時のように都市公害・企業公害の統発する中で注目し値するものと思う。

(現代技術史研究会)



エ・J・キング 編
鈴木祥蔵・西村亮一 監訳

社会主義の教育

社会主義教育の実践

海老原治善

一

本書は、イギリスの著名な比較教育学者E・J・キングによる編著の「Communist Education」(一九六三年刊)の全訳である。キングは、現在、ロンドン大学キングス・カレッジで、これもまた比較教育学の先駆者、ニコライ・ハンス

のあとをうけて、リーダーとして活躍している。訳者の二人、本学の鈴木教授と親密な関係にある。

今日、アメリカの威信の世界的低下とともに、ソヴェト社会主義も、中ソ論争以来そしてチエコ介入を契機として、そのあり方が、鋭く問われ始めている。そして、中国は、社会帝国主義、あるいは

社会軍国主義として、きびしい批判をうづけているし、わが国の新左翼も、一樣にスターリン主義による歪曲としてこれまた激しい非難を浴びせている。

教育研究の世界においても、かつては無条件な権威として、理想として、ソヴェト教育は、大きな位置を占めていた。が、中ソ論争の過程で、中国への深

い斜傾がみられ、一時は、ソヴェト研究の文献や紹介さえ途絶えることもあり、なかなかソヴェト教育のリアルな認識を得ることが困難であった。

こうした歴史の時点において、ソヴェトを始めとする社会主義の教育を、イギリス人らしい冷静な態度で、客観的に紹介しようとした本書は、われわれをして、科学としての接近の姿勢をあらためて教えてくれる。ところで、本書は、全部で二二章から構成されている。第一章から第八章までは、ソヴェト社会主義の教育、第九章は「東ドイツの教育―その目的と成果―」、第二章「中国の教

育」、そして、最後の章として「共産主義社会の教育と西欧社会の教育との間の共通の基盤」ということで締めくくつて

二

E・J・キングは、編集の方針として、その序文に「この本全体の目的は、(事実以外の)何ごとかを説得したり信じ込ませたりしようとするのではなく、そうではなくて、理解に役だつ適當な資料を提供しようというのがそのねらいなのである。それがヒューマニティの本質である。」(三ページ)と述べている。これが確かに全体を貫らぬいてゐる。以下、八章までのソヴエトを中心に紹介をかきね問題点を記してみよう。

第一章は「共産主義教育におけるイデオロギーの概念」で、編者であるキングが執筆している。ヨーロッパにおける教育思想の歴史系譜を背景に、マルクス主義教育思想への論評をこころみ、その共通する部分と異なる部分を論じ、とくにソヴエト社会における教育が、たんに制度としての学校によるものでなく、全体としての社会による教育のシステムにその特徴があることを論じ、西欧として学ぶべき点は何かを述べている。

「学校と生活との結合、認識と価値と実践の連結、すべての人のための新しい文明の建設に積極的に参加しようとする

献身的な情熱、さらに工業化された生産力のあらゆる利点」を学ぶべきこととしてあげている。

第二章は、「ソヴエト教育心理学」で、ネール・オコナ(イギリスにおけるソヴエト心理学研究者のサイモンと並んで有名な人)が執筆している。一九一六―一六〇年、とソヴエト教育心理学の発展を三期にわけ、各期における指導的論文の要点を紹介しながら、その特徴点を描き出している。そして最後に、最近の研究課題として、理解力と概念形成、問題解決、技能と習慣の獲得、動機づけと個人差の四つをあげ論及がこころみられている。

とくにイギリスにおける「人間の遺伝学的研究の長い系列から高まった強調が能力差を奨励」した方向に対し、ソヴエト教育心理学が「教育の効果を最大限に発揮させる方向」での研究を追及してきたことを指摘している点は興味深く、今日のわが国においての問題状況を考えるとき貴重な示唆を得ることができよう。

第三章は「家庭と学校におけるロシアの子どもたち」で、ロンドン大学教育学部で、児童の発達研究のメリイ、ワディント女史が執筆している。子ども達の養育に第一の責任をもつ国の児童政策が論ぜられるとともに、一九三〇年代以降、家庭の教育的役割の復位と大きな位置づ

けが述べられている。祖母の役割にふれたあたりは注目される。

またイギリスとソヴエトの幼児教育の違いにふれ「ロシアの幼稚園は就学準備であり、西洋の保育機関は、保護された環境の中で、子どもに世界を探究させる機会を提供するものである」と要約している。これも、わが国の幼児教育を考えるとき示唆的である。そして最後に、西洋の子どもたちは「国民の幸福よりも、人類の幸福の方がいっそう大切である」と教えられている。しかし人類の幸福は、子どもたちが心に描くにはむずかしい、遠く離れた目標である。もしわれわれが、ロシア人のような愛国心を利用して、子どもたちを鼓舞して、犠牲を払わせたり、あるいは個人的関心事を越えた、積極的な行動を子どもたちにとらせることができるのであろうか」という問いをなげかけている。

第四章は「ソヴエト教育における伝統的なものと独自のなもの」で、ハル大学教育学部の教育学担当のウイリアム、R・フレージャーが書いている。ロシアの伝統をふまえたうえでその革命論の社会主義教育の成立を評価しつつ、とくに一九五八年の教育改革によるスターリン主義的な経済従属をおもわせる教育からの改革への前進をみとめたいうえで、なお「競争力的な近代化の速度」から、緊張が今後

は起きてくるだろうと指摘している。

第五章は「ソヴエトにおける教師の役割地位ならびに訓練」で、英国視学官協会会長のA・E・アダムス女史が執筆している。ソヴエトの教師が「最高級の知性をもった人は多くは―もしくは長くは―いない。しかしすくなくして立派な意志と相當の知性を備え、教えんことを生産の仕事とし、また生きる道としてゐる人々が高い比率を占めている」と指摘し、その教師たちの権利や役割を、西欧諸国と対比して述べている。

第六章は「ソヴエト学校における選別と分化」で、ウエスト・インデイス大学のジョン・J・フィガロがかいてゐる。彼は冒頭「ロシアの教室を訪れて、それらが『共産主義的』であるのと同じくらいに『ヨーロッパ的』とも見える」という事実を、私は何度も何度も驚かされた」とかいてるようによい、そこでは無選別、無能力別編成が、強調されているにもかかわらず現実、そうでないものもかからずである。とくに芸術分野、学力競走のオリンピックiad、体育競技のスパルタキアードの存在に言及する。そして、最後に「共産党自体、注意深く選ばれたエリートなのである」と指摘するこの部分は争論とならう。第七章は「総合技術教育の原理」で、リーディング大学のケネス・F・スマートが執筆し(19頁下段につづく)

飛鳥京跡の木簡

■ 古代の謎に挑む

Ⅱ

網 干 善 教

飛鳥京跡は飛鳥時代約百年間の都のあったところであり、現在の奈良県高市郡明日香村に所在する。

紀紀によると飛鳥の地には推古天皇の豊浦宮、小墾田宮、舒明天皇の岡本宮、皇極・斉明天皇の飛鳥板蓋宮、川原宮、後飛鳥岡本宮、天武、持統天皇の嶋宮、飛鳥浄御原宮など多くの宮都が造営された。

私は昭和三十五年以來、本学教授末永雅雄先生のもとでの飛鳥京跡の発掘調査を実施してきた。その間、敷石建築遺構、井戸跡大溝など広範な地域にわたる壮大な京跡遺構や土器、櫛、

研究ノート

■ わたしの



硯、鏡などの遺物も検出した。そのなかで私の生涯忘れることのできない成果の一つの木簡の出土の日の思い出がある。

昭和四十一年度の発掘調査は昭和三十八年度調査によって一部確認した南

北方向の大溝を南から北に向って掘ることにした。この大溝というのは幅約一・五米で、溝の両側は長さ七〇厘米位の大きな石を整然と並べて側石をつくる立派な溝であった。幅一・五米といえは用にも相当するような遺構である。

この溝の底を丁寧に掘っていた学生の一人が一片の木片を見つけた。長さ十厘米、幅一厘米に満たないような木片を何気なくみると、そこに墨で文字らしきものがあつた。「どうも読めませんが何か文字があるらしいです。」といつて知らせてきた。よくみると明らか

た

に文字である。「ついに木簡が出土した」

本簡というのは短冊形の薄い木札に文字を記したもので中国では居延出土の木簡が知られているし、わが国では藤原京跡や平城宮跡から多量の木簡が出土した。しかし藤原や平城京が造営される以前の飛鳥宮跡から木簡が出土したことは文献の限られた日本古代史の研究上重要な意味をもつ。とりあえず木簡が出土したことを電話で末永先生に急報した。慎重に作業をすすめるよう指示されたので、調査に参加している学生諸君に特に発掘上の留意点を伝えると共にピンセットやシャーシなどを準備した。その日は溝のなかから二、三点断片が出土したが、翌日から

は量も増え、溝以外にも埋まっていたことが明らかとなった。

「とにかく飛鳥京跡にも木簡があり、その埋蔵する地点が明らかとなった以上、これ以上掘出すことは、えかって資料を損失することになるし、現在の我々の調査の目的は開発から守るために遺跡の範囲を確認することが先決であるからこれ以上木簡を掘り出さない」という基本的な考に立つて必要な部分のにてとどめることにした。したがって今後この地点を発掘調査すればまたまた木簡が出土することは確実である。

茲に掲載した写真はその時出土した一枚の木簡の表裏であるが、「占部」、「矢所部」「若」などの文字がみられる。また他の一面には「大田部」、「文部?」、「長谷部?」、「月」と読める文字がある。

他の木簡には「大部Ⅱ大伴部」や「田部」など多くの部の名称がみられ

ることは、当時の社会、政治機構を考える上で極めて重要なものといわなければならない。

この木簡は一体何を意味しているのか現在のところはあまり明確でない。若し今後このような木簡が多量に出土するとすると、主として日本書紀を中心とした文献史料にたよっている日本

古代史研究が、また新しい角度から検討されるようになるであろう。

ただ今の段階でいえることは、これが飛鳥時代の遺物であり、まぎれもなく当時の文字である。そうすると日本で最も古い文字の一つであることはいうまでもない。

古代史の謎といわれる飛鳥京跡がそ

いわゆる「マイホーム主義」について

十 (じゅう) はじめ

「……二人のために世界はある……」最近このような歌詞の歌をよく耳にする。そしてこの歌は星の数ほどもあるうかと思われるほどの流行歌の氾濫の中で相当広範囲の階層に抵抗なく受けいれられているようである。この歌の表現する思想は、現代社会における人々の精神構造のある一面を鋭くえがきだしているように思われる。現代の我々の社会において、既成のあらゆる常識・権威・道徳・宗教等の虚偽性・欺瞞性が暴露されたとき、人々を守るべきものをはや「わが家」以外にもちえず、ただ「わが家Ⅱマ

イホーム」の中にしか、自らの新たな「理想」「幸福」「平和」等を抱くことができないうのは必然かも知れない。

かくして我々は単純にこの「マイホーム主義」を、閉鎖的あるいは利己主義等のレッテルを貼りつけて、非難し、切り捨ててしまふわけにはいかない。切である。即ち、少くとも「マイホーム主義」が社会的に一つの問題意識を投げかけ、一つの思想として勢力を持ち、その地位を築きあげるからには、それは当然に当該社会の基本的矛盾の諸現象の「契機」なすものと予想されなければならない。

このような理由から我々は、この「マイホーム主義」を分析し、即而向自的な反省規定としてとらえかえし^{註1}、その中から我々の運動の論理を描出しなければならないだろう。

^{註1}種々の理由からこの小論では具体的な資料による例証がなく、一般的抽象的な概念の展開に終ってしまった。しかしに方法論的にはできるかぎり正確を期したつもりである。

一 「家」について 「マイホーム主義」を研究するにあつ

の壮大な遺構を現わし、そこで使用された器物やこのような木簡が続々と出土し、日本古代史がより正確に理解できるよう、この発掘調査を続けるつもりである。

(文学部助教)

り、まず問題となるのは、「マイホームⅡ私の家Ⅰ家」即ち「家」とは何かということである。ここで概念を整理するために手元の国語辞典を引いてみよう。家(いえ) ①人の住むための建物。②自宅。③(古語)妻。④家族。⑤世帯主を中心とし、これと親族法上の権利義務の關係で連なる家族の一回。⑥先祖から伝承した代々の名跡。家名。⑦家系。家から。家の格。門地。⑧よい家柄。名門。等々が記されている。これらを概念の性格から大別すると、①②の人の住む建物の意味、④⑤の家族の意味、そして残りの⑥⑦⑧が超歴史的共同体としてのいわゆる「家」の意味である。従つて「マイホーム主義」とはこの三種の意味の複雑に入りこんだイデオロギーであることがわかる。いいかえれば、①②の意味における「マイホーム主義」は、自分の家(建物)を確保するという即自的形式での願望であり、④⑤の意味では、他人のこ

とはともかく、自分の家族の構成員の幸福をひたすら追求するというエゴイズムであり、⑥⑦の意味では家族内における神秘的、伝統的な要素の強い道徳的倫理的秩序を維持しようとする一つの要求である。かくして現実の意識形態として

の「マイホーム主義」はこれら三種要素から構成されていることがわかる。しかしこの三種のいずれにも共通する意識がある。それは家族を守り、あるいは家族秩序を維持するという思想である。では一家族とは何か？ 家族の本質は何か？

家族の一般的分類として、通常、大家族、中家族、小家族等の分類がなされる。その他様々の形態の家族があり、時代とともに、地域とともに変化する。しかし家族の構成の中心となるのは、どのような場所、どのような時代においても一定の組あわせの男女である。即ち、家族は婚姻生活の一現象として構成されるのである。いいかえれば、家族の本質は婚姻であり、婚姻の歴史的一契機として家族共同体が構成されるのである。

では婚姻は、歴史的にどのようにその形態変化をうけてきたのだろうか？ 又論理的にいかんにか形成されるのか？

方法論的に、実体上の即目的家族概念と、向目的法制上もしくは觀念上の「家」意識の両者を同時に分析の対象とすること、あるいは「家族一般」

から出発することは誤りである。我々は現実の歴史の実体としての家族を表象しつつ、一般的家概念から觀念上の「家」意識を抽象した結果得られた家族の実体概念から出発しなければならぬ。

二 近代以前における家族

原始時代における、従って狩猟や採集によって生存していた頃の人類は、明確に規制された婚姻制度を持っていなかったと思われる。そこにおいては一対一男女の長期的な結合というものはまだなく、きわめて自然的偶然的な動機により結合し、離散していったと思われる。なぜならその時代においては言語の未発達のため自己意識が確立しておらず、いわゆる理性的な人間の結合は未だなく、自然的、感性的なものが支配的であったからである。

人類における階級対立の端初は、家族の成立である。まず一夫一婦制の慣行とともに、男性と女性の対立が始まる。次に親子、兄弟姉妹の形で階級分化が始まる。即ちここに抑圧者被抑圧者、支配者被支配者の区別が生じ、すべての矛盾が発生し始める。

歴史に現れる最初の階級対立は、一夫一婦制における男女の敵対関係と合致し、また、最初の階級抑圧と合致する。エンゲルス「家族私有財産及び國家の起源」岩波文庫 P 86 ~ 87

注、「ファミリー」という語は本来は「奴隸」を意味した。エンゲルス前掲書を参照。

この家族の発生、従って支配者被支配者の発生の物質的基盤、いいかえれば非生産人口の発生の物質的基盤となつたのはいまでもなく、農業の発生、そしてその生産技術の向上であった。かくして人類は、それがいかなる矛盾にもとづくにせよ理性的動物として、自然的感性以外のものにもコントロールされる自己を形成していった。そして自己目的の運動体たる物質的精神としての歴史を歩みはじめるのである。

動物的な野蠻の段階以上人間社會の一切の発展は、家族の労働がその生計の維持に必要なもの以上の生産物をつくるようになった日から、即ち労働の一部分をばや単なる生活資料の生産のためでなく、生活手段の生産にあることとなった日から始まる。「エンゲルス「反デューリング論」岩波文庫(下) P 82

家族の発生について次のような生物学的遺傳学的説明も可能である。即ち自然淘汰の理論を媒介にして、原始的な雜婚、集団婚の中で、親子間さらに兄弟姉妹間いわたつた種族は絶滅し、婚配を制限しなかつた種族のみが生き残ったとする。従って家族はその禁止規範

の現実化された形態だとする。このような見方も誤りとはいえないが、これのみを主張するのは一面的にすぎるのであろう。

そして生産が単純な自給自足ではなく、交換のために行われるようになると私有財産意識が発生する。もちろんこの私有財産制は個人的なものでなく最初には家族集団に属する財産という形態をとる。家族内部においては家長が権力を握り、女性は家族内労働者として男性に抑圧されることになる。いいかえれば一夫一婦制は男性による女性の抑圧としてその最初の形態を現したのである。

このような人間そのものの私有を認めるいわゆる奴隸制社會から被支配者達にある程度の自由を与え一つの階級として形成した農奴制社會に封建制社會になってくると、家族制度は支配階級として、身分秩序を維持するため重要な意味をもつてくる。即ち「家」の相続による身分の伝達、分家等による本家との格差等々。更に経済的には、農奴家族の領土内への固定、家族内における代々の職業の継受等により生産秩序が保たれた。又この時代における婚姻の形態は下層階級(農奴)にあつては、頭主の苛酷な収奪による経済生活上の理由で必然的に一夫一婦制が確立する。従ってこの時代において「家」意識が生じたのは、一定以上の身分、特定

の職業を有する家族であった。「家」意識の分布状況に関しては福島正夫「日本資本主義と『家』制度」(東大出版)に詳しい実態調査がなされている。

封建制社会における農奴にあつては、彼らの人間の自由が著しく制限された為、生産意欲がわかず、従つて生産力の増大にも自ずから限度があつた。

一方、商品交換の盛んな場所ではいわゆる商業資本家が發生し、都市を形成していった。この都市における自由な商品交換取引は、封建時代の身分制秩序を廢し、法的に自由、平等な人格を旨とする社会秩序を確立していった。そしてこの勢力は次第に封建勢力を圧倒し、新しい価値体系を築いていく。即ち私有財産制にもとづく資本制生産体制である。

ところがこの資本制生産においては豊富な労働力が必要である。そこで資本家は労働力の供給源を農村に求める。かくして農奴の獲得をめぐって封建貴族と資本家の最後の戦いが始まる。しかし自由を求めた農奴と資本家の豊富な物質力はついに封建勢力を打倒する。かくして資本主義社会は成立した。

三 近代以降における家族

資本主義時代に入ると、制度上において全階級にわたる一夫一婦制がほぼ確立し、又自由主義、個人主義の原理とと

もにいわゆる共産婚が制度上採用される。しかし近代の資本主義の生産は、自らの必須生産要素たる労働力の確保のため、従来の封建的閉鎖的「家」制度を圧倒し、また、家内工業的な手工工業による小生産者を崩壊させ、次第に「家」を解体して行く。そして以前の倫理的、道徳的結合体としての家族集団を、単なる経済的相互扶助の生活団体として変化せしめる。

マルクスは次のように指摘する。

「大企業は、家事の領域の彼方にある社会的に組織された生産過程において、婦人や青少年に決定的な役割を与えることによつて家族と両性関係とのより高い形態の爲の新しい経済的基礎を創り出す」『資本論』第一巻第四編第十三章第九節工業立法イギリスにおけるその一般化。向坂訳第三分冊P107後に詳しくのべるが日本においてこの「家」制度の解体は充分に行われなかつた。むしろ明治二十一年民法で

「家」制度が強化された。これは日本資本主義が、産業資本時代を充分に經過せずに一挙に国家独占資本主義体制に突入したためである。従つて人民の個人主義的権利意識が薄弱なため、官僚支配が強固にいさむたり、その意識は第二次大戦後にまで残存している。要するに資本主義の生産は、家族を労働力の再生産過程の一契機として、経済

法的範疇の中に組入れてしまうのである。とくに産業資本時代にあつては、農家の娘等が低賃金の下に工場に集められ、資本家による苛酷な搾取がおこなわれた。そしてこの場合、家族間の相互扶養義務がこの低賃金の支柱となるのである。更に家族制度は納税、兵役に大きな役割をはたすようになる。従つて家族内における相互扶養義務は、自発的なものに委ねておくだけではなく、社会的に強制規範として立法化されるようになる。要するに資本主義時代において、

まず私有財産制の確立から、それまで「家」に所属していた財産が各個人に所属するようになり、それとともに家族は経済的共同体として、もっぱら消費団体としての機能を強めてくる。そして封建時代における中家族制から、一組の夫婦そして少数の未成年者から構成されるマードックのいわゆる「核家族」Nuclear family がその大部分を占めるようになる。

一方このような単婚に対して売春制度が公然化してくる。即ち資本制生産の発展は社会の全分野が商品等物交換の範疇に組入れられるのを助長するのであるが、女性の肉体も一個の商品として売買の対象となつてくる。注。エンゲルスは次のように云う「近代

世界では単婚と売春がなるほど対立物ではあるが、しかし不可分の対立物、

同一の社会状態の両極である」「一家族、私有財産、國家の起源」P108岩波文庫。また資本主義的単婚そのものも売春の一つの形態であるとする。「彼女(妻)がふつうの売春婦と区別されるのは、彼女が賃銀労働者として自分の肉体を一回いっきりで貸貨するのでなく、一回こっきりで奴隸制に身を売り渡してしまうことによるだけである」『前掲書』P94

産業資本時代の支配的婚姻思想として、我々はカントのそれを挙げる事ができる注10。

カントによれば、婚姻とは「人間性の法則注11により必要な契約」である。即ち法的に自由なる意思を有する人格者間の相方の合意による契約なのである。そしてこの契約が通常の物權的契約、債權的契約と異なる点は、互に一方が他方の物件的取得により自分自身を回復し、人格を確立することであるとする注12。

従つてその理想形態は当然一夫一婦である。また婚姻が契約の一契機となすという理論構成から、それは何らかの形で契約として外部に表示されなければならない。これが婚姻登録制¹³戸籍制度である。かくして社会的に公示されない婚姻は原則として婚姻として認めべきでないとする。

注10 カントの思想一般がフランス革命に大きな影響を与えたことは周知のと

おりであるが、カントの思想そのものが先行してブルジョア的政、経済、道徳秩序を創り上げたのではない。ある体系的思想が完成されるには、その思想を生む現実の具体的歴史的基盤が必要である。いいかえればある思想¹¹を価値判断が生ずるのは、その価値体系を欠除する実体的基盤が現実存在するからである。解答は問題が与えられた時に生ずるのである。

¹¹カントにおける「人間性」の理解は次のようなものである。「人間はあらゆる風土と土地のすべての性質に対して規定されていた。だから人間のうちには多種の萌芽と自然素質とがすでにあつたにちがいない。併し第一に、この萌芽の自然素質は種々なる人間のもとに分割されているのではなく最初の間夫婦のうちに合一して一つのものとして想定されねばならぬ。従つて素質の展開が場所に順応するのであつて、すでに展開している素質に従つて場所が求められるのではない。」原作「カント哲学の体系的解釈」P 222 要するにカントにあつては人間性といつても、生産的実践によるその形成という論理が捉えられていないのである。

また、カント倫理学においては、人間相互間の関係は道徳的關係以外のもの

はなく、従つて行為主体の人間と人間との交渉における目的自体としての人間性が道徳的關係を基礎づける。¹²平等な人格の結合をもつても本質的には次のような内容をもつ。

「男女の結合が統一を保つて解釈が任意にいっしょになつていただけでは充分でない。相手を支配し統御しうる為には一方は他方に服従し、また、相互に一方は他方に何らかの点で優越してはなくてはならぬ。……文化の進んだ場合には、それぞれ一方が異質な仕方では優越してはならぬ；……これに反してまだ文明化されていない、状態においては、優越はもっぱら男性の側にある。「山下・坂部訳「人間学」カント全集II、P 207-210。このようなかの思想は現代社会の法体系における「男女の本質的平等」のまやかしに大きな影響力を与えている。ではカントにおいて現実には婚姻生活を成立せしめる基盤は何であらうか？それは道徳律である。カントによれば婚姻生活が順調に継続する為には両者が互に他に対する道徳律を遵守していくことが必要である。

さて資本の集中による独占資本時代から國家と独占資本の密着した國家独占資本時代にはいけると、婚姻に対する思想も

大きく変化する。まず婚姻の現象形態に

関しては、自由主義、個人主義思想にもとづく産業資本時代の自然的肉體結合としての婚姻思想から、むしろ精神的倫理的結合をその契機とする婚姻思想へと変化してくるのである。この理由として向自的には次のことが考えられる。即ち産業資本時代における個人主義的自由主義に対して、國家独占資本時代においては、いわゆる福祉國家思想、あるいは「支配される民主主義から支配する民主主義へ¹³」（ビュルドー）等に表わされた全体主義、官僚主義の風潮が支配的になり、政治、文化等の領域において、自然的外面的自由（いわゆるホッブスの自由）が否定され、反対に閉鎖的内面的精神的なものの中に自由、幸福が求められるようになる。従つて生産力の増大による、またいわゆる低開墾国からの収奪による相対的物質の豊富さによる階級意識の低下とあひまつて、政治は一部官僚の独占物（もちろんその背後には独占資本がひかえているのだが）となる。かくして婚姻においても、親子関係においても「愛情」という倫理的契機が重視されるようになる。

¹³ この福祉國家思想、ビュルドーの「支配される民主主義から支配する民主主義へ」のイデオロギー攻势が、向自的には階級対立の激化に対応する一つの現象であることはいうまでもな

い。

このような資本主義的生産下における全体主義的官僚主義の思想として我々はヘーゲルのそれを代表として挙げる事ができる¹⁴。

¹⁴ ヘーゲルの思想は、資本主義ブルジョアと絶対主義國家官僚との妥協の産物であるが、その価値体系は、國家独占資本時代における支配層のそれと全く同一と考えることができる。

ヘーゲルによれば、家族は「抽象法」と道徳の統一としての倫理的実体と、欲求の体系としての「市民社会」との媒介的実体である。即ち家族は愛と感情に支えられ、道徳等の倫理的実体を止揚した存在として扱えられる。そして家族成員が個々に独立することによつて家族の實體の統一が崩壊し、欲求の体系として自己疎外されたのが「市民社会」である¹⁵。

従つて婚姻も倫理的契機として把握され、婚姻の自然的感性的側面の強調や、カントの個人主義的自由主義的契約婚の理論に対しては批判的である¹⁶。ヘーゲルは云う「婚姻は、直接的な倫理的関係としては、第一に自然的生命性という契機を含んでおり、しかも実体的関係として、総体的性における生命性を、即ち類の現実にあられた姿および類の過程としての生命性を含んでいる。他方自覚された形においては、第二に自然的両性の

単に内面的な統一、換言すれば、潜在的に存在し、まさにそれが故に実存に現れては、単に外面的にすぎない統一は、精神的統一へ、即ち自覚された愛へと転化せしめられる。^{註17}「要するにヘーゲルにあっては、婚姻は倫理的精神的契機として把握され、更に家族も単なる消費共同体でありえず人倫道徳の実現の場として重要な意味をもつのである。カントにあっては家族は、個人的自然的経済的結合の契機であったのに反し、ヘーゲルにおいてそれは、愛情に^{註18}よる精神的倫理的契機、更に子供を成育する為の契機であった。」

^{註18}「家族は自然的な仕方で、かつ本質的には人格の原理によって多数の家族に分岐するが、これらの家族は總じて具体的な独立人として、従って外面的に相互関係を有つ。換言すれば、まだその概念として存在する倫理的理想としての家族統一中に結合している諸契機は、概念から独立の実在性へと解放されねばならない」高峯訳ヘーゲル「法の哲学」下、P、47、

^{註19}「契約の概念に婚姻は包摂されえない。これを包摂せしめるなどは——いとも恥すべきことといわざるをえないが——カントによってなされた」高峯訳「法の哲学」上P104

^{註20}高峯訳「法の哲学」下、P、33

^{註21}「愛とは一般に私と他者との統一

の意識をいう。しかし愛は感情であり、換言すれば、自然的なものの形式における倫理である……(愛の)第二の契機は私が自己を他者のうちにえること、即ち私が他者のうちにおいて他者たるゆえんに達するということである。従つて愛は悟性の解きえない最も大きな矛盾である。」前掲下P21

四 現代における「マイホーム主義」

日本において「家」制度が全国的に制定されたのは明治三十一年民法制定以降である。その間「教育勸励語」等によって、家族制度はますます固定化し、敗戦後民法大改正による「家」制度の廃止に至るまでの期間、身分秩序の維持、租税とりたて、兵役等その分野において大きな役割をばした。

^{註22}「國家の臣民に於ける、猶ほ父母の子孫に於けるが如く、即ち一國は一家を拡張せるものにして一國の君主の臣民を指揮命令するは、一家の父母の慈心を以て子孫に吩咐するを以て相異なること」教習勸諭より

しかし財戦後、新憲法下に旧民法の封建的要素を取り除いた改正民法が施行され、「家」制度も廃止されることになった。かくして一般国民の間に、とくに都市の住民の間に、始めて個人主義的倫理感が芽ばえ、また個人主義的自由主義にもとづく多くの法制が制定された。

敗戦により日本の経済界は混乱をきわめ、生産力もどん底の状態にあった。政府はこのよな中で旧債権債務を帳消しにする為、強度のインフレ政策をとった。しかしこのインフレは労働者の労働意欲を低下させ、その混乱は極度に高まった。しかし朝鮮戦争はこのような経済危機を救つた。即ち朝鮮戦争におけるアメリカ軍のいわゆる「特需」によつて重工工業部門を重点として設備投資がなされ、また年間数億ドルにのぼる外貨が流入してきた。その結果、鉄、鋳石、綿花、原油等々の原材料の輸入が可能になり、再び生産力が拡大された。このような循環で生産力が急激に増大していったのである。一方政府財政も昭和二十八年ごろから急速に膨張し始めた為、昭和二十四年のいわゆるドッジプランによつて一たんおさまっていたインフレが再び激しくなってきた。だが昭和三十年ごろを境にして、資本の蓄積と集中がほぼ完了し、また企業の自己金融方式^{註23}の採用等により、相對的安定成長の時代はいった。しかし日本経済は國家独占資本期としては異例ともいえる年間十%近い高年成長を続けた。かくして過剰資本の時代になり海外侵出が再び始まるのである。

※ 企業の自己金融方式の採用は、國家の管理通貨制と並んで國独占を古典的帝國主義と區別する重要なメルクマールである。この自己金融方式は株式

会社制度の否定的契機である。即ち金融資本の資本集中作用の限界に対する独占資本の自己防衛策である。

このような経済状況の下に生活物質の量の相對的安定、また家庭電機器具、自動車等の普及により、最低辺階級を除く労働者の相当の部分が現状に対して感覚的に満足感を抱くようになってきた。とくに大企業、独占企業の組織労働者の生活水準は目だつて向上していった。

一方政治闘争の分野においても昭和三十年以降の「指導部」の日和見路線、労働資族化は、以前からの理論的貧困とあいまつて「指導部」としての權威を大衆的に喪失し、更には昭和三十五年の安保闘争時に、その反階級的性を自ら暴露してしまつた。そしてそれ以後各労働組合の間には、構軍派、社民が優越していき、またこれに対応して崩壊寸前の「指導部」は組織たてなおしを図り、同じく社民路線、労使協調隠健路線をとりはじめる。

かくしてこれらの経済的状況、政治的状況が労働者の意識に影響し、政治的不信感がつり、表面的に政治意識が次第にうすらいでゆく。

また権力の側からは、自らの國独占資本制を維持するため、様々なイデオロギー攻勢が行なわれる。「民主主義のいきさき」「自由のはきちがい」等々に始まり、支配される民主主義から支配する民

主義に象徴されるようにやがては資本主義の理念なき放棄して人間は食えさえすればよいと、人間を牛やブタと同視するいわゆる福祉国家思想、あたかも日本が世界の中心であるかのような幻想をまきちらし再び天皇をもちだそうとする民族主義、等々により一般国民はほとんど自由の感覚、民主主義の精神を失いかけている。

これら諸々の要素は、自分の家の確保の要求とあいまって、戦後の個主義的自由主義という新しい価値感の下に育った若い世代が現実の大きな壁、矛盾にぶちあたった時、大きな抵抗もなくマイホーム主義を受容した。とくに戦争によって生じた膨大な数の破綻した家庭に育った若い層には、幸福なマイホームの姿こそ理想とするところだったのである。当初にも述べたように苛酷な搾取社会に生きる現代の人々は、マイホームの中にやすらぎを見出そうとするのである。いいかえれば、疎外された現代人は家族の愛情によって疎外感を止揚しようとするのである。

このようにみてきたとき、マイホーム主義の根底にあるのは、社会と家庭の相互関係、いいかえれば経済的共同体と倫理的共同体の相互関係として異質のものとするヘーゲルの家族思想である。本質的にマイホーム主義はヘーゲル思想の一契機として現存しているのである。即ち

一家の主人は経済社会（ヘーゲルのいわゆる市民社会）で労働し、交換価値を手に入れ、労働力の再生産（自己保存、子孫の育成）の必要物資を手に入れ、愛情によって互いに結合する倫理的共同体Ⅱ家族の中でそれを現実化するのである。

五 結 び

ではマイホーム主義のもつ基本的矛盾は何なのだろうか、我々は現実のマイホーム主義の形態へヘーゲルの家族思想等を対象として分析を進めよう。

では夫婦間の倫理感は何のようものとして成立しているのだろうか、ヘーゲルはまず男性と女性の本質的差異をのべる。「女性はもちろん教養を持つことはできるが、普通のものを要求する高度の科学、哲学およびある種の芸術の創作には向いていない。女性は着想、趣味、優雅はそなえうるが理想を有しない。男女間の区別は動物と植物の区別である」^{註30} ここでではあきらかにカントの本質的平均等^{註31} 即ち環境による女性の役割の変化を認める考え方が異なり女性の本質的超時代的劣等へのべられたい。更にヘーゲルは言う。「婚姻は本質上一夫一婦制である。けれど婚姻関係に身を置き、かつ身を委ねるものは人格、即ち直接的排他的個別性であるからであり、婚姻関係の真態および内実（実体的主観的形式）は従ってひとえにこの人格の

双方からの完全一体をなせる献身からのみもたらされる^{註32}」さらに云う。「（婚姻の）客観的出発点は兩人の自由な同意、しかも婚姻という統一によって自己の自然的且つ個別的な人格性を止揚して一人格を形成しようとする同意である。この統一は自然的個別人格から見れば一つの自己制限であるけれども、兩人格がこの統一に於いても自己の実体的自覚を獲得するのだから、まさに兩人格の解放である^{註33}」このようにヘーゲルにおいては、倫理的共同体による家族において、兩人格の自己制限によって、相互に他人格を解放するのである。いいかえれば人間としての人格は家族に於いて完成されるのである。

^{註30} ヘーゲル高峯訳「法の哲学」下P 31
^{註31} カント「人間学」前掲注参照
^{註32} ヘーゲル前掲書下P 32
^{註33} ヘーゲル前掲書下P 24

かくしてマイホーム主義従ってヘーゲルの家族思想の基本的矛盾は、家族内における相互制限が自己の人格の解放であるところにある。いいかえれば夫婦が互いに他を制限しあう中に人格の解放があるとするのである。だが我々の人格の解放はヘーゲルのいわゆる市民社会の中に求めなければならない。即ち疎外された労働の廃止こそ我々の人格の解放でなければならない。とすれば家族内に

おける相互制限は人格の解放ではなくむしろ本質的に人格の自己疎外の一形態にほかならぬ。マイホーム主義の本質は、男性による女性の束縛であり、逆に云えば女性による男性の束縛でもある。従ってマイホーム主義追放の運動は、女性解放の運動であり、男性解放の運動でもある。即ちそれは人類解放の運動^{註34}であり、プロレタリアート解放の運動^{註35}である。いいかえればマイホーム主義は我々の人格の一疎外形態として今日現象しているのである^{註36}。

註34 このように女性解放運動は人類解放運動と直接に結びつくのであるが、このことは我々男性が女性解放運動を即自的に組織、展開していくべきことを意味するのではない。女性解放運動の直接的契機は、彼女達自身の疎外形態を直接感じとれる人間、即ち女性自身^{註35}が創造していかなければならない。偉大な女性よ出でよ、女性解放運動の先頭に立て!!

註35 マルクスは云う。「人間の人間にたいする直接的な、自然的な、必然的な関係は、男性の女性にたいする関係である。
この自然的な関係のなかでは、人間の自然に対する関係は、直接に人間の人間に対する関係であり、同様に、人間に対する（人間の）関係は直接に人間の自然に対する関係、即ち人間自

身の自然的規定である。従つてこの關係のなかには、人間にとつてどの程度まで人間の本質が自然となつたか、あるいは自然が人間の人間の本質となつたかが、直観的な事実にまで還元されて現れる。「経済学哲学草稿」岩波文庫P138 このように、マルクスは男性の女性に対する關係が、自然的に自然なほど、即ちあらゆる虚偽、欺瞞が少くなり純粹になればなるほど、またそれが可能になればなるほど、人類の解放はすみ、人間性が回復されるとするのである。いかに言えば人類がいかに解放されたかは、男性の女性に対する態度、現象を見ればわかるというのである。

註55 だからといって、組織論的、運動論的に直接にこのマイホーム主義の基本的矛盾をふりかざして大衆の中にはいって行くことはできない。それは不可能に近い。ここに現実の組織論のむづかしさがある。もちろんマイホーム主義の否定的契機として現実には、共かせぎ夫婦の増加、マスコミの発達による家庭の主婦の政治的関心の増大、一世帯一住宅の未普及等々が現象しているが、これらはいずれも客観的、外面的なものにすぎない。かくして組織論的にはどうしても反戦平和とその端初的契機をなさざるをえないと思われる。即ちマイホーム主義の成立

する前提として、社会が安定し、物質がある程度充足している状態、いかにすれば、戦争がなく、従つて家族の一人が欠ける心配がないという状態が前提となる。このようなマイホーム主義的の閉ざされた意識の中にはいって行くには、これらの肯定的契機を媒介にした組織論が必要となる。

(未完)

(一九六八、七、三二)

(11頁下段からつづく)

ている。社会主義教育のいわば白眉の部分である。機械生産、化学生産、農業生産およびエネルギーの四つの産業部門の基礎的原理の学習と、現実のソヴェト社会での社会主義的生産の実態との結合をめざされ「社会的有用労働」参加や、そのための実施技能修得の過程が叙述されている。

第八章は「高等教育」でオックスフォード大学のC・L・レンが書いている。一九六一年の三月の高等教育改革の法令の解説を中心に問題点をコメントしている。高等教育の大衆化を始め、新しいソヴェト人育成にはたす高等教育の役割が述べられている。ここでもいうなら堅実な教育システムの展開を知ることができる。

三

以上、各章ごとに、簡単な紹介をかねて、若干の問題点をみてきたが、全体として感ずることに、社会主義社会の建設というコースをめざし、堅実で着実な政策の展開がおこなわれていることを、その行間から読みとることができた。もちろん、観察者が、イギリス人ということもあったのかも知れないが、それにしても、現実に社会的責任をもつものが、一般に堅実で、それゆえに冒険とか、新規な試行、革新に乏しくなりがちなよう

に、後者の観点に立てば、まだまだ社会主義、共産主義の理想からいえば、未解決の問題が山積しているのを感じることができる。

一九五八年のいわゆるフルシチョフ改革はその故に、中国からいえば修正主義であり、理想的見地からいえば、不徹底といえる側面も指摘しうらるだろう。けれども、それに、社会主義的、民主主義の原則が、復権され確立されてゆくならば、それらの諸問題も、また着実な解決をみてゆくのではないかと、考えられる。いずれにしても、社会主義教育も、客観的分析の対象にすえ、その諸問題を冷静にみつめ、研究する姿勢こそ、この際、われわれ日本の教育学研究者がもつべきではないかと思う。

その意味で、本書の刊行は意義深い。ただ五八年改革以後の激動は激しく、さらにあらたなところの観点からの研究が期待される。そのためには本書が広く読まれることを願つてやまない。

(福村書店刊 一六〇〇円)

文学部教授

安保論争が、全国民の最大(の)の関心事になっている。

一方において、万國博という資本の粋を集中したお祭さわきが、相も変わらさかんである。

安保(むち)と万國博(あめ)——これ程奇妙でおもしろいとり合わせはないだろう。

安保における矛盾を万國博で解消しようという政府ブルジョアジーの意図に多くの國民はまきこまれていく。

それは日帝の七〇年代の総路線——侵略と抑圧——に示される安保繁榮論である。

大学の危機が國家の危機のまじしをみせ、國家の危機が大学の危機を一層促している。

これは、大学だけに限られたことではなく、我々の全ゆるる面——生活全般にわたっての危機の進行である。

我々の社会生活総体にかけられてきている政府ブルジョアジーの帝國

主義的再編の政策——政治的、経済的イデオロギー的による高度の管理社会において、我々は、権力からのつくられた、もの。に対して、我々自らが下から、つくる。運動、闘いを組織し、展開しなければならぬ。

十年前が、朝鮮戦争特需による日本経済のたてなおしから、工業の重化学化、エネルギーの石炭から石油への変化、失業対策としての軍化学工業部門へ対する設備投資等の池田内閣時代の所得倍増計画とよばれるものがあり、増々のインフレが進行して来た。

そして今は、資本の自由化に対処すべく、鉄鋼等の合併、あるいは大企業による中小企業の系列化、吸収といったことから、国内市場の飽和から、市場を海外、とりわけ東南アジアに対する米帝、フランスとの市場再分割を行ないつつ、日帝の市場園確保をなしとげんとしている。

また、七二年の沖繩返還というま

やかしでもって、東南アジアに対する経済的主導権のみならず、政治的軍事的ヘゲモニーの貫徹をねらっている。

この政府ブルジョアジーのうらがえしとして、社共の言う沖繩返還がある。

「民族の悲願」と言って沖繩を返還しろと言った所でどうしようもない。

沖繩が返った所で、自衛隊の沖繩派兵が必ず行なわれるだろうし、本土の沖繩化に他ならない。

沖繩問題は、沖繩人民による沖繩の解放によるしかないのであって、我々は、それとの連帯をはかり、その中からインテリナショナルな連帯を図って行くべきである。

六月という、政治の季節に、我々は今立たされている。

今回の安保自動延長は、沖繩返還をそのメルクマールとし、政府ブルジョアジーによる謀略が全ゆるる手

段を駆使してなされている。

それに対して、広汎な反対運動が全国各地で展開されている。様々な形態の運動が展開されている。

六〇年当時が反戦、平和を願う闘いであったとするならば、現在は、権力。そのものをめぐる闘いとして現存しているのではなかるうか。

國家の危機が進行している。それは總体においてである。資本の論理が貫徹されればされる程、危機は増々深まって行く。

その危機に対して我々はいかなる対応をなすべきであるか。それが我々に課せられた任務ではあるまいか。

それは様々な分野での様々な対応があるだろう。

日常に埋没することは許されぬ。

(T)